

## 「茶わん供養」から「べんじゃらプロジェクト」へ

アリタセラのイベントの見直しから環境整備までの計画立案及び事業化支援

浜野 貴晴

promoduction(プロモダクション) 代表 / 佐賀県窯業技術センター 外部アドバイザー  
国立大学法人 佐賀大学 肥前セラミック研究センター 客員研究員 / 有田町 クリエイティブアドバイザー



### 1. はじめに

有田焼卸団地協同組合(山本 幸三 代表理事)は、「茶わん供養」の一環として、令和3(2021)年春より、供養後の茶わん等の器をチップ状に粉碎加工し、植栽足元の敷材として再利用する取り組みを始めた。

焼きものへの感謝の気持ちを込めて、40年の長きにわたり毎年11月に行ってきた「茶わん供養」では、欠けたり割れたりしてしまい役目を終えた愛用の茶わんを広く一般から奉納いただき、供養を執り行ってきた。

これまで供養した後の茶わんは、産業廃棄物として処分してきたが、その有効活用を考えた結果、細かく砕いた

陶磁器片に加工することで、同組合が運営するショッピングモール「アリタセラ」の中央大通りの植栽の足元に敷き詰めるグランドカバー材として再利用することが可能となった。まさに有田焼産地らしい景観材料としてアップサイクルされる。

有田焼の商社組合として、販売した後においてもその焼きものの行く末を見据え、さらに愛着を持って長年使っていたいただいたお客様の器への想いに応え、そして日々の生活を豊かにしてくれた道具としての焼きものへの感謝や大切にしている心を醸成していこうという「茶わん供養」を発展させたSDGsへの取り組みである。

## 2. 目的と経緯

平成28(2016)年の有田焼創業400年事業を機に、アリタセラ(旧・有田陶磁の里プラザ)も、有田焼の販売を担ってきた拠点という位置づけから、さらなる産業基盤整備が求められ、外部のクリエイターやシェフなど食と器文化に関わる専門家や、広く観光客までを迎え入れられる滞在型の交流及び情報発信を強化するべく、敷地内の空き店舗を活用し、レストランを併設した宿泊施設を開業することが決まるなど、新たな展開が始まった。

そこで平成30(2017)年より、事業化推進とPR支援のため、筆者がアリタセラのクリエイティブディレクターに就任し、もっと魅力的な場所に自分たちの手で変えていき、発信していくための体制として「魅力創出プロジェクト」を立ち上げ、場づくりとしての環境整備、イベント等の見直し、情報発信のための事業推進を月例にて行ってきた。

その一つの対象が、「茶わん供養」の内容見直しと認知向上であった。

有田焼卸団地協同組合では、昭和55(1980)年より、秋の自主開催イベントとして、「有田のちゃわん祭り」を開催している。その中心となる行事が「茶わん供養」である。

アリタセラのシンボルとして南館に常設展示している「茶わん神輿」は、平成3(1991)年、有田焼の窯元62社の協力のもと、総数679個の茶わんを積み上げられて制作され、焼きものの神様として地域に親しまれる「陶山神社」の分霊が座す御神体として長らく祀られてきた。



御神体として祀られる「茶わん神輿」

陶磁器商社が集うアリタセラでは、有田のちゃわん祭りにて、この茶わん神輿を前に陶山神社宮司による「茶わん供養神事」を粛々と執り行ってきた。令和4(2022)年の開催で40回を数える歴史ある神事であり、当日は組合員

はもとより、佐賀県、有田町、関連団体などから多くの窯業関係者等が集い、焼きものへ一年の感謝の気持ちを示す地域の神事として地元で親しまれている。



茶わん供養神事の様子

有田焼産地らしい取り組みとして好意的な評価がある一方、一般には茶わん神輿の存在すらあまり知られておらず、組合としてその価値を明確に伝えられてこなかった。

そこで、まず令和元(2019)年より2か年にわたり、経済産業省の「商店街活性化・観光消費創出事業」の採択を受け、茶わん神輿周辺の環境整備に着手した。来街者に神輿が祀られている意図を理解してもらえよう、五色幕やしめ縄、本坪鈴と賽銭箱を設置し、神社らしい設えとした。

「茶わん供養」では、毎年多くの方々から、欠けたり、割れたりして役目を終えた愛用の茶わんを奉納いただけてきた。日々に豊かさを与えてくれた器との別れを惜しみ、供養することは、「厄災消除」の身代わり祈願となり、さらには代々に渡り食することに困らない「子孫繁栄」にご利益があるとされる。これまでは供養を目的に茶わんを持参いただき、納めていただくのみであった奉納の所作も見直し、陶山神社宮司からの助言のもと、新たに「茶わん絵馬」を用意し、茶わん供養奉納時に、茶わんの形をした絵馬に御霊を移し、感謝の気持ちを書き添え、新設した「絵馬掛け処」にご奉納いただく取り組みを始めた。



茶わん絵馬

これにより、茶わん神輿がどのような意図で、アリタセラに鎮座しているのか理解が進むとともに、これまで、11月の有田のちやわん祭り期間中のみ受け付けていた茶わん供養奉納も、茶わん神輿の傍で、一年を通して承れるようになり、以来毎年250ほどの絵馬を奉納いただくとともに、茶わん神輿を参拝する観光客の姿も頻繁に目にするようになった。

さらに、毎年2月末にアリタセラにて、「茶わん絵馬 お焚き上げ神事」を執り行い、過去1年間にご奉納いただいた茶わん絵馬を丁寧に焚き上げて供養する神事も新

たに始めるとともに、パネルにて茶わん供養の流れを紹介している。



「茶わん絵馬」お焚き上げ神事の様子

### 3. 茶わん供養の発展

令和2(2020)年には、アリタセラの中央大通りの舗装改修を行うにあたり、茶わん神輿をアイストップにまっすぐと通りが伸びることから、石張り風の景観舗装を採用し、茶わん神輿へと誘う参道を思わせる整備を行った。



茶わん神輿への参道を思わせる中央大通りの石張り風舗装

加えて、これまで鬱蒼と茂り、見通しの悪かった両脇の中低木の植栽も一新し、通りの対岸からも店舗のショーウ

インドウや行き交うお客さまの姿も見える風通しのよい景観形成を行い、植栽の足元もすっきりと見えるようになった。そこで植栽足元の地面を覆うグランドカバーの施工を行うこととなり、その材料検討にて、有田焼産地らしい敷材として、陶石とともに陶磁器片の活用案が上がった。これまで供養した後の割れた茶わんは廃棄処分していたが、それらを細かく砕いてチップ状の「べんじやら(陶磁器片を意味する有田の方言)」に加工し、植栽足元のグランドカバー材として利用できないか可能性を検証した。

産業廃棄物であることから、有田町と協議し、敷材として地域内にて活用することに問題がないこと、また佐賀県窯業技術センターは、ハンマークラッシャーを用いた粉碎加工の協力と、土壤に撒いた場合の環境への影響が基準以下であることへの助言を行った。サイズについても、セルベンのように細かく粉碎するにはコストがかかり、見た目も白い砂ようになってしまうことで、陶磁器らしさがなくなってしまうことや、風等による飛散もあることから、ある程度の大きさが望ましい。しかしながら陶磁器片であることから、粉碎部が鋭利となり危険であることから、チップのサイズは、5～10mm程度にすることとした。

べんじやらは、遠目には小さな白い碎石の化粧石に見えるが、釉薬面が日の光を反射してきらきらと輝くとともに、下絵付けや上絵付け、釉薬の鮮やかな色味も所々に見られ、有田焼産地らしい景観材料であるとともに、アップサイクルな建材としての魅力を放つ。



植栽足元のグランドカバー材として敷き詰められた「べんじやら」



ハンマークラッシャーにより「べんじやら」に粉碎加工する様子



「茶わん供養」神事では、「べんじやら」を撒く儀式も加えられた

陶山神社の宮田宮司曰く、「有田の地から生まれた焼きものが、人々の暮らしを豊かにし、役目を終えた後、再び有田の地へと還る」ように、有田にて製造され、道具としての役目を果たした陶磁器の一生を伝えるイベントや場作りを通じて、愛用されてきたお客様の器への想い、焼きもの

への感謝やものを大切に作る心の醸成を試みている。「茶わん供養」から「べんじやらプロジェクト」へと繋がる新たな展開は、まさにSDGsの「つくる責任、つかう責任」への取り組みとも言えよう。

こうした取り組みを遂行していく中で、有田焼卸団地協同組合としても、SDGsへの意識が高まり、令和4(2022)年11月の第40回 茶わん供養・有田のちゃわん祭りにて、組合として「SDGs宣言」を発出するに至った。

「べんじやらプロジェクト」の他、すでに実施している主な取り組みとしては、平成27(2015)年9月から稼働している組合員有志16社事業所の屋根に設置した「太陽光発電所の整備・運営」による「脱炭素社会に向けたクリーンエネルギーへの転換」、平成30(2018)年4月に開業したホテル・レストラン「arita huisの運営」による「食と連携した器文化の発信/クリエイティブプラットフォームの構築」がある。



事業所の屋根に取り付けられた大規模なソーラーパネル



オープンキッチンと広々としたダイニングの arita huis のレストラン

SDGs宣言では、「〈ひと〉と〈まち〉が繋がり、持続可能な陶磁器文化の発展に向けて」と題し、伝統ある有田焼産業の持続可能性を目指した取り組みを、組合及び組合員が実施していこうという意思表示となった。

#### 4. 今後の展開

べんじやらプロジェクトの発表を通じ、べんじやらの建材としての可能性への問い合わせも多数あり、素材提供の依頼から試用試験が行われた結果、令和4(2022)年5月に運用を開始したNHK佐賀放送局の新会館の受付の壁面や屋外に敷かれたコンクリートタイルにアリタセラより提供したべんじやらが用いられた。コンクリートの骨材としてべんじやらを用い、硬化した後、表面をサンディングすることで、陶磁器片が露出する研ぎ出し仕上げの技法が用いられ、佐賀県らしい表現として高評価であると聞く。



NHK 佐賀放送局でのべんじやらの建材への活用事例

今後のべんじやらの取り扱いについては、敷材の他、建材としての利用も考え、有田焼卸団地協同組合が主導し、窯元や商社など、産地から排出される産業廃棄物のアップサイクルの事業化を検討していく予定である。

#### 5. 特筆すべき成果

- 商社組合として、産地の課題や今後の取り組みに関して、意見交換や情報共有する場の創出
- 有田焼産地らしい取り組みの実施と一貫性のある魅力的な場づくり
- 計画された情報発信による対外的な認知の向上
- 実施にともなう関係者の意識の向上と新たな事業への展開

#### 参考資料

「アリタセラ」公式WEBサイト SDGs特設ページ  
<https://www.arita.gr.jp/sdgs/>